

# 学位論文抄録

アルツハイマー病患者における脳小血管病と神経精神症状との関係  
(Neuropsychiatric correlates of cerebral small-vessel disease  
in patients with Alzheimer's disease)

小川 雄 右

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経精神科学

指導教員

池田 学 教授

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経精神科学

## 学位論文抄録

[ 目的 ] アルツハイマー病 (AD) は、近時記憶障害を中心とした認知機能障害の緩徐な進行を特徴とする神経変性疾患である。AD では、認知症の中核症状である近時記憶障害、実行機能障害、構成障害等の認知機能障害に加えて、うつ、不安、アパシー、妄想、興奮などの精神症状・行動障害 (BPSD) がしばしば認められ、これらの BPSD が中核症状以上に本人ならびに介護者に重大な影響を及ぼすことが知られている。近年の脳画像検査の進歩により、AD では脳小血管病 (SVD) が高率に合併することが明らかになってきた。しかし、SVD が AD 患者の臨床症候に及ぼす影響についてはいまだ不明な点が多い。今回、われわれは AD 患者において、MRI にて同定された SVD と臨床症候、特に認知機能及び BPSD に注目しその関連について検討した。

[ 方法 ] 対象は Kumamoto University Dementia Follow-up Registry から選択された probable AD 患者 163 名 (男性 55 名、女性 108 名、平均年齢 76.3 歳、平均 MMSE 19.9 点) の連続例である。脳 MRI において、Fazekas 分類 1 以下かつラクナ梗塞のない「SVD なし群」と、Fazekas 分類が 2 以上もしくはラクナ梗塞がある「SVD あり群」の 2 群に分類し、2 群間において、認知機能、BPSD を比較した。認知機能は、全般性知的機能を MMSE で、近時記憶を ADAS-J cog の単語再生課題及び単語再認課題で、実行機能を音韻的語列挙課題及び意味的語列挙課題を用いて評価した。BPSD は Neuropsychiatric Inventory (NPI) によって評価した。

[ 結果 ] 認知機能については、MMSE、ADAS-J cog の単語再生課題及び単語再認課題、意味的語列挙課題では、2 群間において有意差を認めなかったが、音韻的語列挙課題では SVD あり群において有意に成績が低かった ( $p = 0.013$ )。NPI 合計スコアは、SVD あり群が SVD なし群よりも有意に高かった ( $p = 0.036$ )。下位項目では、妄想の項目が SVD あり群の方が SVD なし群よりも有意にスコアが高く ( $p = 0.013$ )、妄想以外の下位項目は両群間において有意差はなかった。

[ 考察 ] AD 患者において、SVD は全般性知的機能や記憶機能には影響を及ぼさない一方で、実行機能を低下させる可能性が示された。精神症状においては、SVD が妄想を誘発する可能性が示唆された。

[ 結論 ] AD に SVD を伴うことにより実行機能障害が引き起こされ、その結果、妄想が発現しやすくなる可能性が示唆された。